信濃町メディアセンター 館内リニューアルプロジェクトの取り組み

本井英理子（もといえりこ）
（信濃町メディアセンター主任）

1　はじめに

信濃町メディアセンター（以下「当館」とする）では，2023年12月から「信濃町メディアセンター館内リニューアルプロジェクト」（以下「当プロジェクト」とする）を進めている。本稿を執筆している2024年８月時点で当プロジェクトは進行途中にあるため，最終的な成果を報告することはできないが，当プロジェクトの実施に至った経緯や現時点までの取り組み状況，今後の展望について報告する。

2　「学習環境に関するアンケート」の実施

当プロジェクトの開始に至ったきっかけは，2023年５月に実施した「学習環境に関するアンケート」（以下「学習環境アンケート」とする）にある。医療従事者や医学研究者の利用が主となる当館では，電子資料の利用が非常に多い反面，来館者数は年々減少傾向にあったが，2020年から始まった新型コロナウイルス感染症（以下「コロナ」とする）の拡大による入館制限を経て，入館者数はさらに激減した。2022年11月には当館の入館制限が完全解除となったにも関わらず，来館者数は2019年度と比べ４割に満たない月が続いた。特に学生の来館者数の減少が顕著だったことから，コロナ禍を経て学生の学習行動にも何らかの変化が起きているように思われた。もしそうであれば，行動変容の理由を把握し，新たなニーズを満たせるようにサービスを見直していかなければならないと考え，アンケートを実施して利用者の実態を把握することにした。アンケート計画の策定や設問の設定にあたっては，当館で2012年度に実施した「スタディライフ調査」[1)] の記録を参考にした。

学習環境アンケートは2023年５月15日から５月31日までGoogleフォームを使って実施した。対象者は，信濃町キャンパスが主な学習拠点となる医学部２～６年生，看護医療学部３年生，健康マネジメント研究科生のほか，キャンパス内に個人の研究スペースを持っていないと思われる研修医も対象とした。なお，医学研究科の大学院生は個人の研究スペースを所有しているケースが多いため，対象外とした。また，教育的観点から図書館に求める設備やサービスへの要望を聞き取る目的で，教員に対してもアンケートを実施した。学生に対するアンケートでは，最近１ヶ月の信濃町キャンパスにおける活動状況や学習行動，当館の利用状況を把握するための問いに加え，日頃の学習場所の選択理由や不満な点，どのような学習場所があればより学習が捗ると思うかといった，学習場所へのニーズを把握するための設問を用意した。より多くの回答を得るため，回答者には謝礼としてオリジナルボールペンを配布した。

結果的には，学生96名，研修医17名，教員34名からの回答が得られた。学生からは，ディスカッションや仲間と教え合う学習が行える場所を求める声が多かった一方で，静かな個室や仕切りのある学習スペースを求める声も聞かれた。また，動画視聴やWeb会議への参加が快適に行える設備へのニーズも見られた。これは，コロナ禍を経てWeb会議が社会全体で定着したことに加え，医学部ではオンデマンド形式を中心としたオンライン授業が定着し，現在も実施されていることも一因と思われる。来館理由を問う設問では，オンデマンド授業の動画視聴を含む自習目的での来館が多い一方で，館内設置パソコンを利用する目的での来館者数は０名という結果が出た。この結果から，多くの学生は自身で持ち込んだパソコン等を使って学習していることが分かった。教員からは，既存設備のうち「静かに学習する場所」「グループで学習する場所」「講習会やセミナー・発表が開催できるスペース」の改善・増設や，「オンライン授業等で発話可能な個室ブース」「論文・レポート執筆関連資料コーナー」などの新設を求める意見が出た。

７月下旬には，学生課にこのアンケート結果を報告するとともにヒアリングを行い，信濃町キャンパスの学生用施設の現状についての意見交換を行った。これらの結果から，学生の学びの形が多様化していること，それに伴い学習環境へのニーズも変化してきている状況が見えてきた。今求められているのは，多様な学びの形態に対応できる多様な学習環境であるとの認識をもとに，当館パブリックサービス担当は既存設備の改善検討を開始した。

３　改善計画の策定

学習環境アンケートの実施により学生のニーズは掴めたものの，そこから具体的な改善案を出すところで行き詰まった。特に，複数名で会話をしながらアクティブに学習ができるような場所を当館のどこに設置すべきか，うまく定められずにいた。当館地下１階の奥には，グループ学習室という予約可能な小部屋が１室あったが，奥まった場所であることも影響してか利用率は非常に低い上に，換気性能上の理由から2022年以降は少人数でしか利用できなくなり，この部屋の利用促進がしにくい状況となっていた。学生のニーズを考慮すると，最もアクセスしやすい１階閲覧席にこそ会話可能エリアを設置すべきとも考えたが，長年静かな学習スペースとして運用されてきた１階閲覧室を会話可能エリアにすることは，利用者にとってかなり影響の大きいルール変更となることが予想されたため，なかなか決断できずにいた。

また，この段階では改善計画に充てられる予算は確保できていなかったため，現実的にできることは既存の設備や什器をやりくりする程度の小規模な改善計画でしかなかった。そもそも当館は築80年を越え，老朽化が進んだ建物である。どんなに足掻いても，少ない予算で魅力ある設備の図書館に作り変えることなど到底できないように感じられた。

実現可能性に捉われすぎてもよい施設改善は望めないことから，企画段階では多様な知見や視点で自由にアイディアを出し合える機会が必要だと考え，８月29日に当館スタッフ全員参加による「館内環境改善ワークショップ」を実施した。ワークショップは，まず参加者が自由に館内を巡りながらアイディアを出し，次に２班に分かれて意見をまとめていく流れとした。その結果，各班から既存設備や資料配置に関する思いきったアイディアが提案され，館内環境全体を大きく見直すきっかけになった。

９月にはワークショップで出されたアイディアをベースに，各担当のチーフと事務長が複数回のミーティングを重ねて館内閲覧エリアのリニューアル案を固めた。この過程で，単なる閲覧スペースの改修にとどまらず，信濃町キャンパスにおける学生の学習環境向上に資するような視点も盛り込まれた。

図１　館内環境改善ワークショップの様子

案では，リニューアルの目的を「館内閲覧スペースを，多様化する学生の学習スタイルやニーズに対応したスペースへと転換させ，信濃町キャンパスにおける学習環境の向上を図る」ことと定めた。フロアコンセプトとして，１階を「動」のフロアとし，グループ学習や小規模なプレゼンテーションも含むアクティブな学習活動が実施可能な学習空間を目指すとした。一方，地下１階のコンセプトは「静」のフロアとし，個人学習を行うための機能を集中させる案とした。キャンパスとして不足している環境整備にも配慮し，オンライン授業の受講席を地下に設置することにした。

さらに１階は，特定の利用者層を想定して２エリアにゾーニングし，学習席が多く設置されている閲覧室エリアを学生，新着雑誌などが配置された「くつろぎ閲覧エリア」を臨床医・研究者と位置付け，それに合わせて資料配置も見直すことにした。またこれらの計画が確実に実行できるよう，希望通り予算が獲得できた場合のプランだけでなく，予算の手当てがなくても既存施設のやりくりとルール変更だけで実現できるプランも別途用意した。

こうしてまとめられた計画は，12月１日，当プロジェクト特設サイト[2]での広報開始とともに，実現に向けて動き出した。その後，幸いなことに我々のコンセプトが認められ，慶應義塾大学病院の機能充実・機能改善や医療人材育成に向けた機会充実・環境整備を使途とした「慶應義塾医療環境整備資金」[3]から予算がつくことになり，最も不安であった資金面の見通しもようやく立ち，計画の実現に向けて進めることができるようになった。

４　館内リニューアルに向けた取り組み

当プロジェクトで最初に着手したのは，レファレンス資料の移動である。１階閲覧室には，２層式のレファレンス書架が大きく場所を取っていた。館内の一等地とも言える１階に利用者スペースを広く確保したいという意図に加え，近年の冊子体のレファレンス資料の利用度の低さも鑑み，大半のレファレンス資料を地下書庫に移した。移動先の地下の書架も満杯であったため，現在ではほぼ利用のない『医学中央雑誌』や“Index Medicus”などのインデックス資料を閉架書庫に移動し，さらに利用のなかった中国語雑誌を協議会で承認の上廃棄するなどして，スペースを捻出した。空になったレファレンス書架は2024年２月に撤去し，１階に大きなスペースを確保することができた。

続いて，館内設置パソコンの減台に取り組んだ。もともと１階閲覧室にはITCパソコンが20台，地下１階セミナー室には18台設置されていたが，学習環境アンケート結果でも示されたように，これほどの台数を維持する必要性は低いと考えられた。そこで，信濃町情報センターとも相談し，１階は３台，地下は７台に減らした。

こうして１階にできた空間には，地下グループ学習室の可動式テーブルを運び込み，グループワークができるスペースを用意した。この設置什器の変更に合わせ，２月12日から書庫エリアを除く１階全体を会話可能というルールに変更した。併せて１階閲覧室を「マナビバ」，くつろぎ閲覧エリアを「くつろぎ」という名称に変更した。

一方，地下１階のセミナー室は，防音対策が施された環境をそのまま活かし，発声を伴うオンライン授業の受講も可能な「eラーニングルーム」とした。奥まった場所にあったグループ学習室には，１階閲覧室にあった視聴覚ブースや視聴覚資料を設置し，名称を「メディアルーム」に変更した。もともと個人学習エリアとして使われていた地下１階閲覧室は，用途がより伝わりやすいよう「自習室」へ名称変更するとともに，空気清浄機や大型テーブルの設置などにより，より快適に個人学習が行えるよう改善した。

５月には，１階閲覧スペースの壁面塗装やカーペット張替工事が完了した。入退館ゲート前に設置されていた書架は，学生をメインターゲットとした資料群である教科書コーナーや国試・研修コーナーとともにマナビバに移設した。

図２　eラーニングルーム

図３　マナビバおよびマナビバブース

８月の夏季休館期間中には新しい什器が設置され，休館明けから一新した「マナビバ」が利用可能となった。予約可能な半個室スペースである「マナビバブース」が２区画設置され，かつてレファレン

ス書架が大きく陣取っていたスペースには学習の合間にリラックスできる空間となるよう，大きなテーブルやラウンジチェアなどを設置した。このスペースはカフェのような雰囲気を目指し「マナビバラウンジ」と名付けた。

図４　マナビバラウンジ

入退館ゲートの正面は，当館の新着情報をコンパクトに集約して提供できるコーナーとし，新着図書や新着雑誌，OPAC専用端末などを設置した。利用者層を臨床医・研究者と位置付けた「くつろぎ」には，診療ガイドラインコーナーを移設したほか，新たに研究支援コーナーを設置し，研究や論文執筆に役立つ資料群の展示を開始した。

図５　入退館ゲート正面

５　館内サインの見直し

当プロジェクトでは設備や資料配置の見直しとともに，館内サインの見直しも行った。当館は決して広い図書館ではないが，地下フロアへ続く階段に扉が設置されているせいか，地下フロアの存在が利用者にあまり認識されておらず，学習環境アンケートからも利用度が低い状況となっていることが見えていた。そこで，誘導掲示の視認性を高めるため，大きなフォントや矢印を用いた目立つデザインにし，サインスタンドで立体的に掲示することで視界に入りやすくなるよう工夫した。また，歴史ある当館の雰囲気にマッチするよう茶色をベースカラーとしたデザインで館内のサイン類を統一した。この館内サインの一新により，館内全体が落ち着いた雰囲気でありながらも，必要な情報が利用者に届きやすい環境を整えることができた。

図６　地下フロアへ誘導する館内サイン

６　館内飲食ポリシー緩和の検討

学習がより捗り，長時間滞在したいと感じる学習場所とはどのような場所かと考えた時に，飲食可能か否かという条件は大きな要素の一つになるのではないだろうか。当館では，これまで全エリアにおいて，密閉できる蓋つき容器に入った飲料のみ持ち込み可としてきた。しかし学習環境アンケートでは，学習が捗る場所の条件に，食物やコーヒータンブラー等の密閉できない容器に入った飲料の持ち込みも可であることを挙げている学生は多く，ニーズの高さが窺われた。近年は利用者ニーズに応えることや長時間滞在の実現などを目的として，館内に飲食可能エリアを設置している図書館も多い[4)]ことから，当館でも館内飲食について検討を進めることとなった。

主な課題としては施設の汚れやゴミ，臭い，害虫

問題といった館内衛生面，所蔵資料への影響，これらに伴うスタッフの負担増などが考えられた。また，同キャンパスにある慶應義塾大学病院の建物内では感染症対策として引き続き黙食やマスク着用が徹底されている状況だったので，キャンパス全体の感染症対策と照らし合わせて問題がないかを確認する必要があった。国内の他大学図書館で館内飲食を可としているところでは，仕切られた部屋をイートインスペースとして提供している事例が多く見られたが，当館には扉などで仕切られ飲食に適した部屋がないため，特に衛生面での不安や，どの程度の飲食を許容すべきなのかという迷いもあった。

そのような折，信濃町メディアセンター協議会に医学部の学生代表２名が委員として加わることになった。館内飲食について学生の立場からの意見を得るべく，早速委員に委嘱された２名との懇談の機会を設けた。医学部生の日頃の学習の様子や学習場所に求める機能をヒアリングしていく中で，やはり飲食可能な学習場所には魅力を感じるという意見が挙がった。ただし，学習中はグミやキャンディのような菓子類が摂取可能であれば十分であり，むしろパン・おにぎり・お弁当のような食事の持ち込みは，学習場所としての雰囲気が損なわれてしまう恐れもあるため認めないほうがよいのではないかという意見も出た。

こういった学生の意見も参考にしながら更に検討を重ね，当館では８月16日から2024年度末までの約７カ月間，館内飲食ポリシーの緩和を試行することとした。試行内容は，１階マナビバエリアに限り，臭いが出ず手が汚れない菓子類（グミ，キャンディ，シリアルバー等）および蓋つきの容器に入った飲料（コーヒータンブラー等）の持込と飲食を許可するものである。なお，マナビバ内のPCコーナー周辺およびマナビバ以外の館内全エリアは，密閉できる容器に入った飲料のみ可とする既存の運用を継続することとした。試行中には「館内飲食ポリシーに関するアンケート」を実施し利用者の声を集めるとともに，実際の利用の様子を観察して，今後の運用の参考としていきたいと考えている。

7　今後の課題

本稿執筆時点ではまだ当プロジェクトの結果を評価することはできないが，現時点で今後の課題と考えている点をいくつか記しておきたい。

設備に関しては，くつろぎの什器見直しが課題として残っているので，次年度以降に進められるよう検討したい。マナビバは，アクティブエリアとして２月より提供開始しているにも関わらず，いまだ個人での利用が多く，グループワークをしている様子はあまり見られない。８月の新什器設置後の様子を注視するとともに，教員や学生を巻き込んでマナビバでの学習活動の活性化に繋がる働きかけもしていきたい。何よりもまず，当プロジェクトでメインターゲットとしてきた学生達に，当館の新しい学習環境を知ってもらうことが必要である。様々なチャネルを通じて学生にアプローチし，学習場所として根付かせていきたい。

当プロジェクトは複数年かけて行う計画としており，引き続き学生の学びを最大限にサポートできる学習環境を構築していく予定である。また当然ながら，利用者の求める学習環境は，今後もずっと時代に応じて変化していく。魅力ある学習環境を提供し続けるべく，これからも利用者の行動を観察し，利用者の声に真摯に耳を傾ける姿勢であり続ける必要があるだろう。

8　おわりに

当プロジェクトに取り組むなかで筆者が感じたのは，多様なステークホルダーとのコミュニケーションの大切さである。当プロジェクトの遂行にあたっては，信濃町キャンパス事務長をはじめ，管財課，学生課，情報センター，調達会計課，経理課等，様々な事務部門との連携が欠かせなかった。慶應義塾医療環境整備資金から予算を獲得するにあたっては多くの部門との連携や調整を要したが，最終的には医学部執行部から当プロジェクトについて理解を得ることができた。利用者との連携という点では，レファレンスサービスを起点に生まれた教員との繋がりや，信濃町メディアセンター協議会委員となった学生との繋がりを活かして，より詳細なニーズをヒアリングすることができた。利用者との繋がりを大切にすれば，今回のように利用者視点の良質なフィードバックが得られるだけでなく，口コミ等を通じた広報活動にも発展することが期待できるだろう。そして何より，わずか１年足らずで当プロジェクトを大きく進めることができたのは，当館スタッフが一

丸となり，諸々の制約を創意工夫で乗り越えようと奮闘してきたからだと思う。世界に羽ばたく医療人材育成のために，信濃町キャンパスで学ぶ学生の学習環境をもっと向上させたいという各々の思いが，コミュニケーションを通じて当プロジェクトに結びついたのだと感じている。これらの繋がりを今後も大事にし，これからも魅力ある学習環境，資料，サービスを提供し続けていきたい。

参考文献

1）園原麻里，西條智架，三谷三恵子．慶應義塾大学信濃町メディアセンターにおけるスタディライフ調査報告：学生の学習実態に基づいたサービス改善の試み．医学図書館．2013，vol. 60，no. 4，p. 445-458.

2）慶應義塾大学信濃町メディアセンター．“信濃町メディアセンター館内リニューアルプロジェクト”．https://libguides.lib.keio.ac.jp/snm_renewal2023.

3）慶應義塾大学医学部・医学研究科．“医療環境整備・医療人材育成へのご支援のお願い”．https://www.med.keio.ac.jp/giving/campus.html.

4）木下遼香，岡松道雄，宋俊煥．大学図書館におけるラーニングコモンズ及び飲食可能空間の整備実態と配置特性．日本建築学会技術報告集．2022，vol. 28，no. 69, p. 816-821.